

巻 頭 言

学校長 鈴木 由美子

高大接続の推進、大学入試改革など、中等教育改革が急速に進められようとしている。2017（平成29）年の中学校学習指導要領改訂、2018（平成30）年の高等学校学習指導要領改訂により、コンテンツ・ベースから、思考力・表現力・判断力等のコンピテンシー・ベースの学力観への転換が明確に示され、中等教育改革は喫緊の課題となっている。

本校の使命は、「学校教育に係る研究開発の全国的・地域的拠点校であることを使命とする国立大学附属学校として、大学との連携、開拓的な中等教育研究と教育実習研究をもって、社会の豊かな形成に参画する有為な人格を育成する」ことであり、「中等教育研究紀要」は、本校教員による真摯な「開拓的な中等教育研究」の成果を世に問うものである。

「中等教育研究紀要」は、本年で第66号となった。『創立百年史』によると、1920（大正9）年に本校に中等教育研究会が創設され、全国各地から参加者を集めて第1回中等教育研究会が開催されており（当時は附属中学校）、そこには中等教育界をリードしようとする本校教員の使命感が垣間見える。その後、1932（昭和7）年に、本紀要の前身ともいえる『中等教育の実際』が創刊された。このような名称にした理由について、『創立百年史』には、次のように記載されている。

「この機関誌の誌名に、敢えて『実際』という語を用いたのは、根本の問題のほかに、手近な研究も見逃さないという立場を表明するためであり、会員の平素の実践や調査研究を発表して、中等教育界に貢献しようとしたのである。」（『創立百年史』416頁）

その後1952（昭和27）年に、中学校と高等学校がそれぞれ『教育研究』を創刊したが、1959（昭和34）年に『研究紀要』となり、1998（平成10）年に附属中・高等学校『研究紀要』第45号として統合され、今日に至っている。

さて本号に所収された実践研究論文を概観すると、教科としては国語科、社会科、理科、保健体育科、美術科ならびに外国語科の論文が掲載されている。内容を見ると、本校の研究主題である「『学ぶ』から『探す』へ—中・高6カ年の学びの地図」に関わるもの、新学習指導要領の展開と発展に関わるもの、今日的な状況において必要とされる内容に関わるもの等が見られる。また、学校現場においてすぐに使える具体的な教材や授業過程が提案されたもの、緻密な授業分析に基づく授業開発・改善への道筋が示されたもの、日々の継続的な教育実践が研究として結実したもの、科研費による実践研究の成果が示されたもの等が見られる。

いずれも非常にレベルの高い内容で、中等教育の発展に具体的に貢献できるものとなっている。これは、本紀要が成り立ちにおいて有していた、「根本の問題のほかに、手近な研究も見逃さない」という立場が、今日まで継承されていることを示すことであり、伝統の強みを感じるところでもある。

本紀要の刊行にあたっては、担当の教員に尽力していただいた。感謝申し上げたい。また業務多忙の中、論文を執筆していただいた教員にも感謝申し上げたい。本紀要が、中等教育の発展に微力ながらも貢献することを心より願っている。